
真空パラシュート

保地葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真空パラシュート

【Nコード】

N2563C

【作者名】

保地葉

【あらすじ】

アリス・アリサ・サンガツの三角関係は一角失ったことによって壊れた。アリスはサンガツを求め、サンガツはアリサを求め、アリサは…

PAGE「12」【メアリス】（前書き）

※TITLEから作る散文小説です。お題配付サイト＜<http://74.xmbs.jp/curability>＞背徳ガーネット様よりお題お借りしています。

たったひとつ、ひとりしか欲しくない。ひとりしかいなければいいのに。

望みなんて叶わないはずだった。

積もりに積もったガラクタの山、掘り返せば掘り返すほど境界が曖昧になる。マーキングなんてされてなく、分けあうことなんて出来ない。記憶がキャパシティを超えている。

すべてが倍だったから。

ひとつの細胞がふたつになってふたりになった。私たちは、何もかも同じで何もかも違っていて何もかもふたつだった。同じ教科書、おそろいの机、色違いの服、お菓子はいつも半分こ。楽しくて嬉しくてあげられるものは全部あげたしもらえるものは全部もらった。

でも、ほら、悲劇はすぐそこ。

好きになることは幸せなことだって、ママは枕元で囁いたけど、それでも辛くなるの悲しくなるの憎くなるのいつかは分かる。

私たちはひとつじゃないから、ひとつのものを分けあうことなんて出来ない。私たちはひとつじゃないから、ふたりの間には違いがあるって。

鏡に映る惨めな姿、同じ顔同じ声同じ成分で構成されてても違うの。ふたりだから選ばれる。ふたつだから捨てられる。どちらかが生き残る。

持てるものに限りがあるなら持てないものはどうなるの？

3秒以内は親愛のキス、それ以上は恋人のキス。ふたりで決めた3秒ルール。アリサにキスをしてお別れを言う。

今のは何秒？永遠とも思えるほどの冷たさ。

ママがアリサを撫でる。パパがアリサを抱いて連れて行く。マリンブルーのワンピース、シンプルかつ鮮やかに。コバルトブルーの私のおそろいだ。アリサのは肩口がくすんでる。頭から流れた血が付いたから。私のは裾が汚れている。突き飛ばされたとき地面を擦ったから。

アリサが死ななければ私が死んでたのかしら。アリサが私にキスしていたのかしら。

神様はアリサを選んだ。

サンガツもアリサを選んだ。

慰めるように頭を撫でる手が、私じゃなくアリサを見ているようで優しくて愛しくて暖かくて、でも優しさは痛みへ変わる。

「アリス」

サンガツにそう呼ばれたくて、でも同じ人を好きになって。どちらが選ばれても祝福しようね、約束したのに。目の前で選ばれたアリサを見たとき、私は飛び出した。

私を突き飛ばしたのは車じゃなくて、アリサは撥ねられて頭を打って血を流して、死んだ。

私はそうして、望み通り手に入れた。手に入れてしまった。

静かな家、静かなパパとママ。空気が止まってしまった。

ふたりの部屋、ふたりだった今はひとりの部屋に積み上がったガラクタ、ふたつづつ。

もうひとりの私は鏡の中にしかない。ここにいるのはアリス。鏡の中もアリス。

アリサはいない。

楽しいことと嬉しいこととたくさんのことと引き換えに私が手に入れたのはたったひとつだけ。

サンガツ。

誰にも奪わせない。神様にも、アリサにも。

【メアリス】

□背徳ガーネット様／TITLE／PAGE「12」優しさは時に痛みへ から使用させて頂きました。

ねえ、アリサ。待って。

追い掛けるは幻影。追い掛けるアリサ、追い掛けられるサンガツ、僕。

掴まえられる僕に、君は掴まえない。

アリサ。

瞼の奥に焼き付いた姿、呪文なんか唱えなくたって、ほら。

君は確かにここににいるのに。どうして、そんな小さな箱の中に眠るの？

君から分離したもうひとりの君が、箱を抱えて微笑んでいる。本当に哀しい時には涙なんか出やしない。感情が麻痺して、これは映画だ。フィクション、作り物。

君は、愛される天使。純真無垢の女神。けれども盲目の女神は自分のかたわれしか目に入らない。

知っていた、痛いほど、アリスの気持ち、アリサの気持ち。だけれど、我慢出来ず、告げた。アリスが聞いているのも知っていて。

そして僕の幕切れ。

走るアリス。

走るアリサ。

車。

突き飛ばされるアリス。

突き飛ばしたアリサ。

跳ねた車。

(……だから。ね、本当だよ)

君の笑顔が消える瞬間。最後の笑みは僕ではなくアリスに。決して手に入らない、僕のアリサ。

足下に散らばる残骸たち。黒と白と赤と透明と灰色の破片、その中でアリサのマリンブルーが眠り、肩口の赤が鮮やかだ。

最期にアリスがキスをして、アリサは小さな箱に収まった。頭を撫でる。同じ遺伝子だけど感触は違う。

微笑んで僕を見るアリス。

決して手に入らない、僕のアリサ。

「アリス」

願うだけはやめにした。嬉しそうに僕を見つめるアリス。

僕が欲しかったのはこれじゃないもうひとつの笑顔。

君はひとりじゃ寂しいだろう？ 僕からの最後の賭け。

君の笑顔のために僕は。

【メサンガツ】

□お題PAGE「03」 盲目の女神 から使用させて頂きました。

表裏一体のあたし。

詭弁毅然偽善欺瞞疑心戯画、すべてがひとつはらにある。
求めるものは一つだけ。

あなたを手に入れたくて。

片割れのアリス。

首飾りを手に入れました。

あなたで出来た純血ブラッドストーン。

太陽に翳すときらきらと赤く、けれどもそれは夢でした。

あなたをあたしは手に入れられない。

スカートを翻し走って行きます。コバルトブルーが綺麗で鮮やかでした。

あなたがいなくなる、そう思って、あたしは飛び出しました。
こちらは現実でした。

あなたをあたしは手に入れられない。

アリスのためなら。

スローモーションで世界が閉じた。

毒で毒を制するように、愛で愛を制すればいいに。
愛して愛して愛して、いつも置いてけぼり。

アリスはいつもあたしより先にいた。

熱しにくく冷めやすいあたしは、アリスを遠くから見ていた。
だって、激情で傷つけてしまうかもしれない。から。

触ろうと思えば触れたけれど。

でも、温もりを知ったら最後、抱き締めてしまう。キスしてしまう。
ただ、ぎゅっと抱き締めて欲しい。アリスに。

失いたくはありませんでした。目の前で、アリスがいなくなる？
体が走り出します。

指先が届いて、触れたアリスを、突き飛ばします。

遠くへ、遠くへ。

遠くから歌が聞こえます。

あれは安らぎの子守り歌。

意識が霧散する前に、唇に暖かみを感じました。

いち、にい、さん：これは家族のキスカしら？

それとも：

ああ、すべてが空気になる。

アリス。

あたしがいなくなれば、あなたが両手に抱えるのは自分自身。

鏡に写るのも自分自身だけ。

どれだけ淋しいだろう。

どれだけ哀しいだろう。

あたしには耐えられなく、堪えられなく、ごめん、あなたを置いて行く。

最期の言葉だけ、残させて。
まじないのようにあなたに。

「アリサはアリスのなかにいる。ね、本当だよ」

あたしは消えて行く。

あたしが消えて行く。

アリス、アリス、アリス、アリス…

シーンの終了、そして開始。

オールリセット。

□TITLE／PAGE [18] いつも置いてけぼり から使用させて頂きました。

ただすがりつくしかなかった。

サンガツは笑う。

あたしに笑う。

優しくささやく。

あたしを撫でる。

指先が髪を梳く。

爪があたしの頭皮を搔く。

サンガツがあたしの頬に触れる。

微かに血の色が付いた。

あたしは目を閉じる。

背を伸ばす。

キス。

いち、に、さん、し。

唇を離す前、小さく舌打ちが聞こえた。

アリサを失った痛みにも慣れてきた頃、あたしはサンガツと付き合

い始めた。どちらも告白なんかせず、ただ一緒にいるようになった。

サンガツは優しい。

あたしはサンガツを振り回す。

サンガツはあたしに付いて来る。

あたしはサンガツの手を離さない。

指を絡めて握る。

冷たい指先。

首筋に視線を感じた。

あたしは振り返って、笑う。

口のなかで転がした言葉をささやく。

「ねえ、サンガツ」

サンガツは絡めた手に力を込める。そしてあたしを呼ぶ。

「アリス」

目を細めサンガツが笑う。

手の甲に爪が食い込んだ。

悔いを残さないように。

もう失わないように。

あたしはサンガツを離さない。

堕ちゆく先は最果ての、決して生易しくはないけれど。
それもあたしは知っている。

知ってるけど、知っているからこそ。

あたしを透かしてあなたが見るあのこ。

もういないのに。もういないから？

あたしはキスをする。

唇だけが温かい。

気休め程度だけど、あなたの優しさに触れる。

固く結んだ唇。

押し付けられた感触、薄目を開けて盗み見る。

サンガツはほほ笑んでる。

瞳が揺らぐ。

見えるものばかりじゃない。

背に手を回して抱き締める。

あたしの腰に回されたサンガツの腕に力が込められる。

奪わせない。誰にも。

□TITLE／PAGE [07] 堕ちてゆく先は最果て から使用
させて頂きました。

ねえ、アリサ。
きみがいなくても世界は動いているんだ。

僕はその変化に追いつくのに必死だ。
僕の手を握るアリス。
その頭皮を引っ掻き、滲んだ血を頬に擦り付ける。

アリサを思い出す。

僕はアリサに笑う。
アリスが僕に口付ける。
僕は黙ってキスを受ける。

唇は固く結び、触れることしか許さない。
僕は最善を尽くしたいだけで、アリスもそれは同じだろう。
お互いの最善は食い違っている。
僕とアリスは別物だから。
触れる・包む・縫る・傷をつける・侵入する・追いかける。
全部、きつと暗黙の了解のうち。
華奢なアリスの体。

男と女の違い。
優越感に浸る。
絡めた手、
腕にすっぽりはまる体、

細い首。

すべては僕の手の中。

アリスの手に力がこもる。

間合いに引き込まれる。

けれど、僕のほうが優勢だ。

枯渴した逃げ水、僕はすべてをなくそう。

目を細めて笑う、ファイティングスピリット。悲し過ぎるから泣けはしない。

傷付きすぎたからこそ美しい。

三月のお茶会は始まることも終わることもない。

沸騰した水で踊る。

いっそのこと相打ちで。

堕ちていけアリス。

色褪せた極彩色の世界。

君がいない

君がいないくて

君がいない。

君のためという甘美なる毒に侵されて、僕はアリスを失おう。

ねえ、アリサ。

君がいない世界は。

□TITLE／PAGE [08] 色褪せた極彩色 から使用させて
頂きました。

私の代わりに傷付いて。

甘やかな空気は、まるでお互いに硝子の破片を突きつけているよう
で。

柔らかな言葉は、まるで爪の間に刺さり続ける棘のようで。

本当に簡単に、余りにも短絡的に、疑るほどあっけなく、引火点に
登りつめる。弾けてなくなってしまう。あたしとサンガツの関係は。

「サンガツ、」

応えるあなたの口元には嘲笑を。微笑ではなく。感情が籠もってる
分まだいいわ。サンガツがあたしを見る。サンガツがあたしを憎む。
それは愛に似ている？

抱き締める腕。首に回る指。囁く声。責める瞳。それでも、サンガ
ツがあたしを見ている。

「アリス、」

最高傑作の試作品は決して完成しない。だってアリスは死んだから。
愛されたアリスはいないから。

ひび割れは埋まらず、悲しみは慈しみに、憧れは恋に、憎しみは愛
に似ている。苦いのか甘いのか判別できない。

「ねえ、アリスは天使みたいだったね」

いつか言ったサンガツの言葉。あたしは？ 訊いたらサンガツは笑う

だけだった。でも言いたいことは分かった。

（アリスは天使じゃないよ）

天使は神さまの福音を響かせて訪れる。でも知っているわ。神さまなんていない。本当は天使は空手なの。なにも持たず、小さなラッパすら吹かず。それでも愛される。なにもせずとも存在しなくても。天使はただあたしが死ぬのを待っているのかもしれない。けれどあたしは死なない。アリスが死んだから、あたしは死なない。あたしは天使じゃない。

（短絡的ブラフ）

（疑問符がつく）

（だれがあたしを必要としているの？）

「サンガツはあたしを愛してる？」

思わず出た言葉にサンガツは笑う。

「君の終わりは僕の終わりだから」

：ああ、あなたは。

サンガツは、あたしを終わらせたいんだわ。

アリスとアリスは密接不可分の関係で、分かれていることが不自然なのね。サンガツはアリスしか見ていなかったのに、アリスはアリスと一緒にいる。傍にいてもアリスしか見ていない。

全てが空虚。

（なんて、）

「あなたの幸せが見たい」

いつかその一言にあたしを託すだろう。サンガツはどうするかしら。
渡さないわ。サンガツはアリサにも。渡すくらいなら。

…なんて身勝手な終幕。

【メアリス】

□title／PAGE [17] 福音を響かせて

慈しみ、愛でる。

ただそれだけのこと。

慈しむことは傷付けることに、愛することは憎しみに似ている。

憎み、傷付ける。

ただそれだけのこと。

華奢なアリス。

豪奢なアリサ。

僕はアリサを愛したかった。

思うこと一つ叶えば、代わりに願い一つ消えていく。

僕はアリサと共にいたかった。

（ふたごの片割れを愛するだって？ 身代わりとして。なんて愚かな！ そんなものは麗しき寓話の中にしかない虚構だ。）

切っ先を向ける相手は、微笑みながら僕に全てを託した。

「あなたの幸せが見たい」

…僕はゆっくりとアリスに。

（やめろ、やめろ！ 愚かさは時に罪だ。寓話は後悔をせず許されるが、現実には常に懺悔を求め、決して許されはしない！）

僕はアリスの為に、アリスを傷付ける。

アリスの元へアリスを届ける。

それが君の望むことだろうか？

（よく見ろ。それは本当にお前が思うそれなのか？）

はっ、と気付き両手を離れた。崩れ落ちたアリスが咳き込む。

だけれども眼差しは僕を見据え、逸らそうとしない。頼りなさげに揺れたりしない。心許なく不安を写しはしない。

（ああ、なんていうことだ！ 愚かな。）

…致命的な勘違いをしていた。これはアリス。だけれどもアリスでもある。二人が混じり合っている。

世界が歪む。

眩暈に酔いしれる。

僕がアリスを傷付けた。

この僕が。

（お前がその首を絞め、呼吸を止めようと仕損じ、その首に指跡を残したのだ。爪先で皮膚をえぐり、血を流させたのだ。）

ああ、アリサ！
おねがいだから、アリサ。僕を許して。

我が儘な言い分に誰も答えを返さない。

爪すら凶器、言葉は鈍器、思い出は鋭利すぎる。僕はアリスを傷付けることを躊躇わず、アリサを傷付けた。アリサを愛するように、アリサを憎んだ。

アリス、アリサの唯一の片割れ。

アリサ、アリスの唯一の存在。

僕の愛しい人は。

（しかしお前はそれと気付かずそれを傷付けた。お前の想いとは仮初めの忠誠心だ。真実愛する者が間違うものか！）

アリサが欲しい。アリスではなく。愛しいのはアリサ。アリスではなく。傷付けるのはアリス。アリサではなく。憎むのはアリス。アリサではなく。アリサが欲しい。アリサが欲しい。アリサが欲しい。アリスではなく…

（無いものねだりに終止符を。）

「あなたの幸せが見たい」

アリスが微笑む。アリサが微笑む。

君はそれを望むのか。

僕ではなく、片割れを望むのか。

（お前は再び両手を伸ばし、…やめろ、やめろ！ やはりお前は愚かだ、愚かすぎる！）

終わりの見えない中毒ゲーム。

□TITLE／PAGE [10]

「仮初めの忠誠心」から使用させて頂きました

サンガツが爪痕を残した首筋が愛しくて。

細くて、

白くて、

長い首に残る、

青紫の指跡と、

赤く滲んだいくつかの線。

アリスは、傷つけられても美しい。

鏡に映るアリス、

いえ、あたし、

いいえ、

アリス、の首をなぞる、なぞられる。

ああ、すべらかでやわらかく、折れそうで折れない、首。

どうせなら、どうしても。

傷付けるのはあたしだけ。あたしだけがアリスを。

溶けていく意識が何かと交わったのを感じた。目を開けたとき、あたしはアリスの中にいた。盲目のアリスはサンガツしか見ていない。サンガツを見ているけれどその目を見ていない。サンガツの考えに気付いていない。サンガツはアリスの中のアたしに気付いていない。サンガツは決して、あたしを理解できない。サンガツのしようとしていることはあたしの意思に反している。アリスを傷付けていいのはあたしだけよ。

（私は愛しくて爪痕を撫でる。サンガツが私のためだけに付けた、

証。

証はアリサには無く。

証があるのがアリス。

サンガツが選んだ、私。）

（幸せすぎて、私はあなたを見る。笑う。見開くサンガツ、瞳に移る私、少し、アリサに似た私の笑い顔。）

（ア、リ、サ？）

「あなたの幸せが見たい」

アリスの幸せ。

サンガツの幸せ。

アリサの幸せ。

（欲したのは、どれ？）

再び指は首にかかる。少しずつ、力がこもる。この瞬間もいつか過去になる。悲しまないでサンガツ。

願うだけはやめにした。願いは叶えてみせる。願いは捨ててみせる。流れ星の落下地点はここよ。願い事の到着地点はここよ。

あたしはここに辿り着いた。

（私はここに辿り着いた。）

（すべては、）

（あなたが此処にいないから。）

身勝手な、生殺与奪をあなたへ託す。（私は幸せになる。）あたしは幸せになる。

（…じゃあ、あなたは？）

唐突に力が抜け、ゆっくり離れた小指。サンガツは首から手を離す。

（気付いたのね）

（気付いてしまった）

（アリスはあたしのよ）

（アリスを傷付けることはできない）

（あなたが消えればいい）

（あなたは消せない）

（愚かな）

（愛おしい）

（アリスを憎んでもあたしを愛したことにはならない）

（アリスを愛しても私を愛してはくれない）

（サンガツの願いはあたしの願うことじゃない）

（サンガツの願いは私を必要としていない）

「…何が、必要だと、」

キス。

サンガツに口付けられているのに。

あたしの心臓は今何処にあるの？

（私の心臓は今何処にあるの？）

脈打たない。嬉しさも憎しみも喜びも驚きも何もかもがない。

ただのキス。

「…ごめん、」

サンガツが言う。罪滅ぼしのつもり？

「…何故、謝るの、」

そんな言葉じゃ許さない。あなたは間違っていたんだから。

（私は間違っていたのだろうか。）
どくん。

今、脈打った、これは誰の心臓？

（もしかして、消えるべきは、）

体に血が巡っていくのが分かる。意識が、曖昧なものから広がっていく。そう、あたしは目を開けた。あたしは、ここに辿り着いた。

（間違っていた、）

そうよ、アリス。あたしたちはひとつに戻るの。最初に戻る。何もかもを必要としない、あたしたちに戻る。

空っぽなら満たすだけ。簡単よ。

（消えるべきは私。アリスを拒絶した私。自分を拒絶した私。サンガツに拒絶された私。私は消える。繋がりを失う。空っぽの感情が満たされていく。私ではない感情、けれど私の感情。ああ、愛すべき人を間違えていた？憎むべき人を間違えていた？）

アリスはアリスの中にいるのよ。アリスはアリスの中にいるのよ。

（浸食された、）

いいえ、あたしがアリス。

（消えていく、）

いいえ、あたしがアリス。

あなたもあたしも境がなくなる、真空のなかの、向かうべき感情すら、向けられるべき感情すら、何処にも行かず返ってくる。

落下傘を開いても何処にも行けないわ。

あたしは（私は）ここに留まる。まるで、神に見放された御使いみたいね。何処にも行かず、何処にも行けず。

ただ、アリスのなかにいる。

□title09

「流れ星の落下地点」より使用させて頂きました

【メサンガツ】

分からない。

分かりたくない。

ねえ、アリサ。君がいなくても世界は動いていたんだ。

ねえ、アリサ。僕は君に気づけないほどその世界を憎んでいたんだ。

君がいない世界は歪みすぎていて。

僕の指の中の、アリサ。唇が色褪せていく。僕は舌で舐める。アリサの乾いた唇を湿らせて、キスをする。君に出来なかった、口付け。

「…ごめん、」

首を締めていた手を離れた。アリサは崩れ落ち、咳き込み、そして立ち上がる。そして僕に言う。

「…何故、謝るの、」

僕はアリサを愛していたから。

僕はアリサに刺された傷を思う。流れ続ける傷口を思う。

（愚かな愚かな愚かな愚かな愚かで）

閉じて行く僕の世界に、君を閉じ込めてしまおう。

「僕は、アリスを愛せない」

（真実は告げるな）

「僕は、アリサしか愛せない」

（偽りを言え）

「君が僕を必要としないなら」

（自分が死ね）

「僕は君を殺すよ」

君がそれを望んでいることを知っていて僕は言うのだ。アリスもアリサも望むことは似ている。アリスは僕に殺されたい。僕を思うから。アリサは僕に殺されたい。アリスを連れて行きたいから。

アリサが僕を刺したのは、アリスを傷つけた罰だ。

もう、立ってられない。

ぐらり、体が傾ぎアリスにもたれる。アリスの息が僕の胸を湿らせる。アリスは微笑んでいる。僕には分かる。唇が薄く笑う、幸せの息遣い。

悲劇を演じきったら、君は幸せになるのだろうか。アリサ。僕は加害者になるしかない。僕の命が終わる前に、君を傷つける。

歪んだ世界に背を向けてさよならを告げる。

幸せな日常という落とし穴に君はいない。三人の関係は滲んで辛く悲しいものだったけれど、こんなにも歪んではいなかった。

愛情をばら撒くアリス。

それから逃げる僕。

愛情を拾うアリサ。

アリサを大切にしたかった。アリサを救いたかった。（何から？）
アリスの愛情から救いたかった。アリサを殺したアリスを傷つけて

やりたいと思い、傷つけた。アリスの元へ行けばいいと思った。アリスが喜ぶと思った。

だけでもそれは間違いだった。

アリスを傷つけたのは僕。

たった1つの仲直りの術はアリスを君の元に行かせることだけ。

アリスの首に指を回す。アリスが微笑む。力を込める。

アリス。君を愛したかった。

彼方からの潮騒に僕はぐらつく。耳鳴りがする。光が僕を覆い、僕は眩しさに目を細めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2563c/>

真空パラシュート

2010年12月4日05時44分発行